

「心中宵庚申」八百屋半兵衛の形象

——身にふりかかる困難をめぐる——

早川久美子

一 はじめに

近松門左衛門作「心中宵庚申」は、享保七年四月五日宵庚申の日、実際に起こった八百屋半兵衛と千世の夫婦心中を扱った作品である^①。研究史を振り返ると、上巻と中・下巻の間の分裂の問題、あるいは半兵衛の形象の矛盾を指摘する見解が多く提出されている。

松田修は、『新版日本近世文学の成立——異端の系譜——』第三章「夫婦心中の場合」（一九六三年）で、作品上巻で見出すものは、「仕組みからずれた趣向（男色事件・大名の節儉）」であり、中巻は「お千代半兵衛そのものの悲劇ではなく、お千代の父の悲劇なのである。」と言う。さらに心中事件を描く下巻は、半兵衛の形象に矛盾があると指摘する。その矛盾とは、半兵衛が姑に願う「十六年以来たった一度の御訴訟」として「母の悪名」を立てるにしのびな

いゆえ、「少しの間と思し召し虫を殺し、美しうちよめをお入れなされ、其の上にて私が、物の見事に去状書いて暇やります」と言う箇所、さらに、離縁を宣言して「コリヤさんも丁稚もよう聞け。半兵衛が女房去ったぞ。向い隣町内でも、母の浮名を立てたらば聞く事でない」と言う箇所をとりあげる。これらの会話文はすでに心中を覚悟している者の言葉として不自然であり、舅平右衛門との間で交わされた離縁しないという確約も破られたことになると言う^②。

荒木繁は、「心中宵庚申」小論——古典の評価について——（一九七八年）で、松田論文への反論を展開している。彼は、「半兵衛の性格が一貫性を欠くと非難する人は、それが主人公の置かれた状況の差違に基くものであることを見がしている。」とし、具体的に上巻の「浜松の場で発揮された半兵衛の円転滑脱さは、中之巻以降の封建的家族関係の中ではがんにがらみにされ無力化するとい

うふうに描かれている。」と見る。それは「対照の妙」であり、半兵衛の形象に矛盾はない。下巻の彼は、「女房の親と我が親と世間の義理と恩愛」の板ばさみに合うが、心中はこれらすべての要請に一挙に解決を与えるものではなく、そのあるものを選びあるものを捨てる行為ではなかつたらうか。」との解釈を示している。^③

遡るが、ここで松崎仁「心中宵庚申」の作劇法（一九七二年）を参考にしたい。問題となる下巻八百屋の場をめぐって、彼は本作が紀海音の「心中ニツ腹帯」の「本歌取りの書替え」であるとの観点より、「姑と養子夫婦の葛藤を基底に持つけれども、実は妻を愛しながら義理の重荷に押しひしがれる養子の苦しい心情の動きを軸として展開する。」「ゆえに「劇的頂点が葛藤の頂点にはなくて、妻と二人きりの場面における主人公の心情の高潮に置かれる」と言う。^④

半兵衛に「苦しい心情の動き」は認められるとしても、心中回避のための努力や、死を覚悟するまでの経緯がはつきりと描かれていない。半兵衛の形象そのものにも疑点が多いことから、すつきりした作品ではないという印象がある。本稿では、近松の第一作「曾根崎心中」（元禄十六年）を例に、主人公が心中に至る経緯とその方法を検討したい。そのうえで「心中宵庚申」は、それまでの作品とどのように異なるのか、近松が目指した作品はどのようなものであったのかという点を考察してみたい。

二 「曾根崎心中」の方法

心中物の方法を考えるにあたって、まず信多純「近松世話浄瑠璃の方法——心中物を中心として——」（一九六九年）を参考にしたい。彼は、時代浄瑠璃とは違う世話浄瑠璃の戯曲作法を分析する。「曾根崎心中」以下心中物の一曲の構成は、「前半外的葛藤が展開され、後半葛藤の内的展開が多く情緒表現となって現れ、終局に至る」と言う。^⑤

あらためて「曾根崎心中」を確認したい。最初の生玉社前の場で、結婚を約束しているお初と徳兵衛が出会う。徳兵衛は、主人が勧めた縁談を苦勞して断つたことを告げた。そこへ九平次が通りかかる。徳兵衛は、九平次から大金を騙し取られたうえ、謀判の罪を着せられたことを知る。こうして絶対的な窮地に陥った徳兵衛は、その場で九平次に喧嘩を挑むも敗北する。続いて天満屋の場となる。再会したお初と徳兵衛は、足問答によって心中の意志確認をしている。

天満屋の場のお初については、廣末保「近松序説——近世悲劇の研究」「五、心中天網島」——展開その三——」（一九五七年）、原道生「「やつし」の浄瑠璃化——煙草売り源七の明と暗——」（一九七五年）、向井芳樹「「曾根崎心中」の方法——「女のドラマ」の発見——」（一九八一年）など多数参考にすべき研究がある。

廣末論文では、徳兵衛の対立葛藤が天満屋のお初に引き継がれるとし、「お初の性格もまた、この劇のはじめから一貫しており、この劇の葛藤をつくりあげているものであつた。悲劇としてのクライマックスは、だから、このお初の行為が運命を心中へと突きあげてゆく瞬間にあつた。」と説明している。^⑥

原論文では、歌舞伎のやつし事に触発された「やつし」の構想が近松浄瑠璃の中に数多く見受けられるとし、浄瑠璃の「やつし」の男主人公は、女主人公の「弱者をいとしがり庇護を与えずにはいられない」という性向・心情に支えられてのものと見なし得るだろう。

ここでは、男たちの弱さは、却って美点として働くものとなつているのである。」と指摘する。^⑦

向井論文では、「曾根崎心中」を分析し、「女のドラマ」論を唱えた。それは、「女の主人公にのみ、ドラマの主導力と予知力が与えられているものを指すもの」と言う。「予知力」とは、「ドラマの行方を予知する力、予知力を持つてゐること」であると説明している。そして、足問答でお初が心中の決意を促すところは、「女のドラマ」としての特性を最も象徴的に示したものであり、「死ぬ以外に方法はないことを、徳兵衛自身も知つており、それならば自分も当然かつて予感し、予言したとおり、徳兵衛と「心中」する決意のあることを宣言することになる。」と説明する。^⑧

しかし、「予知力」は、限定した範囲の中でしか言えないかもしれない。少なくとも、心中を覚悟する場面では無関係であろう。なぜなら、仮にそれがあるとすれば、九平次を天満屋に登場させる意味も、お初による心中覚悟の意志表示も褪めたものとなつてしまふからである。^⑨九平次の会話文によつて、お初は「証拠なければ、理も立たず。この上は、徳様も死なねばならぬしなるが。しぬる覚悟が聞きたい」と言う。自害するという返事を受け取ると、次のように応えている。

徳様に離れて、片時も生きてみようか。そこな九平次のどうずりめ。阿呆口をたゝいて、人が聞いても不審が立つ。どうで徳様、一所に死ぬる、わしも一所に死ぬるぞやいのと。足にて突けば、縁の下には涙を流し。

その場面は、徳兵衛を庇護するお初が、現在の状況を確認したうえで命を投げ打つ覚悟を決める場面となる。廣末の言う「悲劇としてのクライマックス」は、彼女自身、葛藤を乗り越え死の覚悟を決めるところにあると言える。以上、足問答の方法は、主人公たちが困難に直面し、現状にどのように対処してゆくかという点を中心に描いている。そこに主人公の内面的葛藤をくみ取ることが出来る。その後「心中天の網島」までの心中物についても同様の方法によると考えられる。一つ一つの作品についての具体的な検討は稿を改め

て検討したい。

三 中巻 半兵衛と困難

本作の場合、半兵衛にふりかかる困難は描かれているのであろうか。心中原因は、養母が千世を嫌悪していることにある。それが表面に出てくるのは、中巻上田村平右衛門宅の場である。

故郷浜松からの帰り、半兵衛が立ち寄る。そこには、すでに養母によって送り返された千世がいた。身重の体である千世を不憫に思う平右衛門は、半兵衛に対して、婿入り時の契約を違えたと責めたうえ、「清盛入道は八百屋半兵衛。祇王は千世が身の上よ。その清盛が心變つて追ひ出す。エ、憎や清盛。」などと当てこする。千世の姑去りを知った半兵衛は、すぐさま切腹しようとする。次はその時の会話文である。

親仁様の御立腹、申し開くは知つたれども。我が罪を養ひ親に塗りつくる。不孝者、との一言からは。ゆめく存ぜぬ。我ら去りはいたさぬと、申し分くるほど不孝の上塗り。親仁様につがひし言葉、違へぬ武士の性根を見せる。見て疑ひを晴れ給へと、ずはと引き抜く脇差より。おかるは早く纏りつく。

その直後の平右衛門は「お身があるとは知つての当て言。耳に留つての自害か。オ、よい分別。自害して死んだらば、あれ見よ、八

百屋伊右衛門夫婦。嫁を憎んで去りし故、子は面打ちに自害せしと。養子に悪名、難をつけ。口々に取沙汰せば、手柄く。止めるな娘存分に自害召され。見物せんとの一言に」と言う。この舅の言葉に對して、半兵衛は、「孝心深き肝をひしがれ。ハアさうぢや。あやまつた。まつびらと。」とあつさり心を翻す。

心中物で、身内や店の主人など周囲の人物は、一般に主人公に對して、非を責めつつ意見をするという場面がある。そのために主人公は窮地に陥る。「心中天の網島」中巻を例に考えてみたい。半兵衛の切腹の件と同様、舅五左衛門に責められた治兵衛が切腹に及ぶ場面がある。

上巻曾根崎河庄の場から筋を振り返ると、治兵衛は遊女小春との心中を願っていたが、訪れた河庄で、思いがけず愛想尽かしをされることになる。中巻紙屋内の場で、治兵衛は、小春への未練が断ち切れずに悩んでいた。訪れた叔母や兄より、太兵衛による小春の身請け話を聞く。二人が帰宅したあと、治兵衛はおさんに対して小春の不心中を詰る。そのとき女房おさんは、実は小春に不心中はなく、愛想尽かしは自分の依頼によるものであったことを打ち明け、小春は自害するつもりであると言う。自分の非を詫びつつも、治兵衛は、おさんに背中を押され小春の身請けに行こうとする。そのとき、五左衛門の訪問を受ける。五左衛門に離縁を迫られる治兵衛は、次の

ようにおさんと添い遂げたいと言う。

今日のたゞ今より、何事も慈悲と思し召し。おさんに添はせてくだされかし。たとへば治兵衛、乞食、非人の身となり。諸人の箸の余りにて身命はつなぐとも。おさんはきつと上に据ゑ、憂い目見せずつらい目させず。添はねばならぬ大恩あり。その訳は月日もたち、私の勤め方、身を持ち直し。お目にかくれば知る、こと。それまでは目を塞いで。おさんに添はせて給はれと、はらく。こぼす血の涙、畳に。食ひつき詫げければ。

ただこの時の治兵衛にはおさんの恩愛に報いるすべがない。なおも五左衛門に責められた彼は、「逃れがたなき手詰めの段。オ、治兵衛が去り状筆では書かぬ、これご覧ぜ。おさんさらばと、脇差に手をかくる。縋りついて」と切腹に及ぼうとした。

この治兵衛について、廣末は前掲の論文で自身の「世話悲劇」論の観点から、「もつとも動きのとれない人間」であると言う。それは、具体的に「近松は葛藤を発見しなければならぬ。とすれば、それは、この治兵衛と小春の死覚悟という状況を受けとめ、しかもその死覚悟を一度崩すような行為を、おさんの側から起させるほかない。(中略)一直線に死に向う場合よりも、もつと人間的な苦悩を生かしめるといふ意味においてである。」と言う。ゆえに五左衛門に離縁を強要されたときの治兵衛について「いまのいま彼が体験

したおさんの恩愛が彼をとらえる。」^⑩と言う。

治兵衛の苦悩は、おさんと五左衛門の働きかけによって生じた新しい困難であり、それが分かるように描かれている。しかも、それは、上巻で彼が直面した彼自身の困難が引き金となっており、またそれまで苦悩していた自分自身をすべて否定してしまうような出来事でもある。ゆえに、ここにて治兵衛は切羽詰まってしまい、切腹を決断するほかなかつた。

比較すると、本作の半兵衛は彼自身、養母による嫁去りを知らずにいた。切腹に及ぶのは、平右衛門から詰られたためでもなく、差し迫った状況に追いつめられたためでもない。「武士の性根を見せる」ため、すなわち、彼の判断によるものであったと言える。この巻では、それ以前の心中物中巻とは違い、主人公が直面する困難は描かれていない。

四 下巻 半兵衛と困難

下巻八百屋の場の検討に移りたい。筋は、千世のことで自分を責める養母に対し、半兵衛は行きわたった孝行を尽くし、その後心中へ向かうというものである。先行研究は、第一節で述べたとおり半兵衛の決断に注目している。松田論文や荒木論文など相反する解釈が提出された。

ここでも半兵衛の困難を中心に考えてみたい。半兵衛は、養母に對して彼なりの苦慮はあつたようである。半兵衛は上田村から連れ帰つた千世を、家へは入れず親戚の家に預け、養母と会わせまいようにしていた。上田村の平右衛門より、「氣に入らぬことあらば、打ち叩き、縛り括つても直させ。末々までも見捨てず」添い遂げるようにと告げられていた。ところが大坂に帰つてからの彼は、そのような實際的な努力を放棄している。身にふりかかる困難は発生せず、心中計画は、彼の側から養母にしかける形で行われている。

半兵衛は、養母に向つて、虫を殺して千世を家へ入れるようにと懇願する。その時の会話文は次のとおりである。

申し母ぢや人。いまめかしい申しごとながら。武士の釜の水で育ちしこの半兵衛。^① 二十二の年から御面倒に預り。一人の甥御を差し置き、家屋敷、商売とも。私へお譲りなさる、御厚恩。(中略) 時には、千世めが姑への恨みもなく、お前を慈悲ぢやと言はせたい。十六年以来、たつた一度の御訴訟。老少不定の世の中、たとへ私が先立つても。いかなる後の問ひ甲ひ、百万遍の御回向より。聞き入れたとの御一言。知識、長老のお十念を、授る心とばかりにて。女房の親と我が親と、世間の義理と恩愛と。三筋、四筋の涙の糸、たぐり。出すがごとくなり。^②

単純に千世との心中を願うのであれば、家を出る前にわざわざ養

母を係わらせる必要はないはずである。しかし、彼は、心中計画を遂行するために、書置き、死装束、脇差まで用意し、そのうえで養母に千世を家へ入れるよう懇願した。右の会話文中、傍線部(1)で、彼は、まず「武士」の出身であることにこだわらる。(2)の地の文についても、報恩を行う養子のあるべき姿を全うさせたいとの切なる心情を描いていると見られる。そして計画通り、帰宅した千世に心中覚悟を言い含める。結局、機転の利く彼は、面子を保とうと養母を立て、対決を回避するべく心中覚悟をしている。

ここで問題となるのは、そのような計画を立て、実行に移した半兵衛の形象である。前述のとおり、覚悟を決める時、半兵衛は常に「武士」を自任し公言する。そのような箇所を上・中巻からあげてみると次のとおりである。

ア 魂は武士なれど。三十余年、町人に業も姿もしみつし。料理袴をかりそめに(上巻・郷左衛門に見えるとき地の文)
 イ いかやうとも御存分に遊ばせと。どこやら言葉の引つ放し、残るところが武士形氣。(上巻・山芋問答、郷左衛門の激怒に對する地の文)
 ウ 形こそ町人、心は侍。拙者が日利きで、惚れ手の内へやりませう。(上巻・衆道捌き、侍たちに対する会話文)

エ 元は遠州浜松にて、山脇三左衛門が倅。武士冥利、商ひ冥利。

千世は去らぬ。氣遣ひするな。ア、忝いと、手を束ね。(中巻・平右衛門の会話文。半兵衛の婿入りの時の誓いを言う。)

オ 親仁様につがひし言葉、違へぬ武士の性根を見せる。見て疑ひを晴れ給へと、ずばと引き抜く脇差より。(中巻・切腹時の会話文)

「武士」の意味は、半兵衛の形象の考察に欠かすことができない。浜松城下の「武士」社会を描く上巻を検討してみたい。

五 上巻 半兵衛と「武士」

上巻では、半兵衛は山芋問答と衆道捌きの二つの事件で活躍し、賞賛されている。何ら困難な事態に直面することはない。

重友毅は、『日本古典文学大系 近松浄瑠璃集上』(一九五八年)の「心中宵庚申」解説で、山芋問答にまつわる諸事節約の家風に享保の改革の影響を見ている。^⑩ 諏訪春雄は、『近松世話浄瑠璃の研究』第十六章(一九七四年)で、この重友説をふまえ、「享保の大改革の大胆なパロディ化であり、その批判であった。坂部郷左衛門を代弁者として語られる城主浅山殿の勤儉節約は、吉宗のそれであり、町人八百屋半兵衛が、郷左衛門をやりこめる山芋問答には、天下の台所大坂の町人の享保の改革に対する反撥心が托されている。」^⑪と言う。

しかし、半兵衛が郷左衛門をやりこめる場として、山芋問答を描いたのであるか。彼が拵えた料理は、五尺の大芋を三寸ばかりに切り刻んだものであった。郷左衛門は、「でつかいところをお目にかくるが御馳走」であったのにと激怒する。半兵衛の反応は次のとおりであった。

半兵衛、膝も動かさず。これは旦那の御意とも覚えず。今日のお料理、随分切り方に気をつけ。心一杯でかせしと、一分自慢。御褒美はなされいで、存じの外のお叱り。総じて貴人、大人へは。何に限らず、かやうの珍しき物、お目にかけてぬが料理の習ひ。大名、高家は大様にて。一度お目に触れられては、沢山にある物と思し召し。隣国のお出会ひにも。身が領内には、珍しき山の芋ありなどと。お国自慢のお話の上。ふと余国より御所望の時、後へも先へも行かず。国中を尋ねても有り合せず。おのづから、殿様を嘘つきにしてのける。(以下略)

ここで問われているのは、料理の腕前ではなく、判断であった。郷左衛門は半兵衛に対し、「あんごり、ム、こりやもつとも。イヤもつとも。あやまり申したく。そちが言ひ分、まつすぐに。御前へ申すがまた御馳走。やれく、やれく。山の芋で足突いたと。どつと笑へば。」と賞賛と謝罪の言葉を述べている。「言ひ分」の身をみると、右の傍線部のとおり殿様が浅慮であることを前提とし

たものである。また、郷左衛門の「御前へ申すがまた御馳走。」との箇所は、言葉通りであるとすると、現実には理解しがたいものである。半兵衛の「言ひ分」はそれであつたとしても、称える郷左衛門には、実際的な考えが認められない。作者は問答そのものを挿擄するつもりで描いている可能性がある。

二つ目の衆道捌きに移りたい。半兵衛は、武士四人の惚れ手を前に弟小七郎に死に装束をさせ、あの世で添う覚悟のある者をただす。奴の小一兵衛だけが白刃を持ち「こゝで死なねば、心中が見えませぬ。是非に死なせてくださいと、立ち上がるを」と男気を見せたので、弟の今後を頼んだというものである。

この場面について、井口洋は、「『心中宵庚申論』（一九八一年）で、人物の「性格」は「具体的にどのような行為として人生の場所に発現するのか」を把握すべきであるとの視点を示している。前の「山芋問答」は、半兵衛の「武士」性が「町人」的な才覚で補充されるという「性格規定」の役割を担うものであると言う。そしてこの「衆道裁き」は、半兵衛の「恋愛観の根本」を示すものであり、中巻で千世を連れ戻す半兵衛の行為として発現すると言¹³う。

衆道捌きは、たしかに彼なりの恋愛観によるものかもしれない。しかしこの場で注意したいのは、下品な言葉遣いや見苦しい様子を繰り返している点である。例文は、侍三人が小七郎を奪ひ合い、

半兵衛に交渉するところや、選ばれた小一兵衛のふるまいに見られる。

○君にかゝつて、一貫五百が外郎つんだこの甚平。弓矢八幡、身にくれる。イヤサこの逸平にくれろうと。耳際に咬みつくことく、悪風吹きかけ、眼もくらみ。前後忘るばかりなり。

○イヤサ、当国は女のみだらは下々まで御政道。衆道にはお構ひなし。三人のうちどれへなりと。魂据ゑて、返事せると、もやつく後ろに。

○お侍方と同座のならぬ奴めが。武士に劣らぬ魂故。結構なお若衆様の兄様とは、忝い／＼、冥加ない。手付けにちよつとほてくろしいこと、御免／＼。半兵衛様も気をお通しと、べつたり抱きつく、紺のだいなし、白無垢に。黒白、粋の兄弟なり。

衆道捌きに決着をつけた半兵衛は、彼自身小一兵衛に対し、「山脇半兵衛が挨拶。向後、兄分に頼んだぞ。」と実家の姓を名乗る。そこでは、さらに「今日の料理の御褒美に。二人がことを旦那へ訴訟。権柄晴れて、ねんごろさする。その仲立ちち半兵衛が。八百万代の神かけて、結ぶ。契りぞ」と自負を見せている。

山芋問答は、浅薄な人間同士のやりとりであることを確認した。そのすぐ後に淫らで露骨な衆道の現場が続いている。ゆえに作者は、享保の改革を批判したというより、改革も含めた武士社会の在りよ

うや、そこで生きる世事に疎い人間の考え方を問題視していると考えられる。

二事件に共通する半兵衛活躍の特徴は、次のとおりである。

- ① 活躍は、半兵衛の鋭い判断による。
- ② 彼は賞賛され、「武士」であることを自負する。

③ 武士社会以外の一般の目からすれば、浅薄なやりとりをし、たにすぎない。

六 「武士」の最期

近松は、半兵衛の人物を野菜づくしの道行で次のように描写している。

半兵衛といふ名にも似ず。たゞ根深くも思ひつむ、わか菜心のつき詰めて、言葉の義理にはじかみや。ちしやは惑はず、勇者は恐れぬ。生れつき。さすがは武士の種ぞかし。

この箇所について、先学たちは特に注目していない。前半は、先んじた心中覚悟をさすものであろう。後半の「ちしや」「勇者」という大仰な誉め言葉は、言葉通りでない。「さすがは武士の種ぞかし」には、皮肉の意がこめられていると考えるのが妥当であろう。以下、その点を確認したい。

道行のその後は、次のとおり半兵衛が不孝を悔いて嘆く。

「心中宵庚申」八百屋半兵衛の形象

水路の。姑去りで殺したと。悪名つけて、世の人の、わらびませうがお笑止と、悔めば、夫はずいきの涙。なう、そなたさへそのごとく悔んでたもるに、この半兵衛。年頃日頃の御厚恩、送らで死ぬは人のくず。罰をかぶらん恐ろしと酸漿ほどな血の涙、はらく。

最期場の述懐で、半兵衛は千世を道連れにする迷いや恐れを口にしている。「この書置にも書く通り」として、次のように言う。

元はわづかの八百屋店。今では人に少々の銀貸すやうに、儲け溜めても。辛い目ばかりに日を半日、心を伸ばすこともなく、死なうとせしも以上五度。恨みある中にも、そなたに縁組み。せめての憂さを晴せしに。それさへ添はれぬ様になり、死ぬる身にまでなり下る。よしない者に連れ添うて、半兵衛が身の因果。そなたにまで振る舞ひ。在所の親仁、姉御にも悲しいことを聞かすと思へば。この胸に鎚をかけ、肝を猛火で煎るやうなエ、口惜しいと、拳を握り。膝に押しつけ、身を震はし。涙はらく、

これに対し、千世より「あれまた愚痴なことばかり、(中略)その愚痴なこと言ふ手間で、早う殺してくださいませ。」とたしなめられる。

いよいよ半兵衛は千世の喉に脇差を押し当てようとした。千世は、

「なう、待つてたべ、待たしやんせと。身をすり退けば」と身を動かす。それに対して、「半兵衛。待つてとは未練な。刃物を見て、俄に命惜しなつたか。卑怯者めと、睨めつくれば。」と言う。このように強い言葉で女主人公が責められるという惨たる場面は、近松の他の心中物では見られない。千世は、応えて五月の腹の子の回向をしてやりたいと述べるや、半兵衛は、「男も声をすゝり上げ。おれもなんの忘れうぞ。もし言ひ出したら、そなたの泣きやらう悲しさに。黙つていたとばかりにて。一度にわつと声をあげ、前後。正体なき叫ぶ」と言う。子を思う親の悲しみは当然あるうが、道行の「さすがは武士の種ぞかし」とは程遠い有様である。

半兵衛の最期は、海音作「心中ニツ腹帯」と共通する点が多い。辞世二首は同じであり、実説によるものと見られている¹⁴。ただ、最期を迎える様子は、海音と近松の二作で違っている。海音作を見ると、夫婦は潔い最期を心掛け、それぞれその場で辞世を詠む。腹を脇腹より半ばまで切つた半兵衛は、切腹は亡き主君への殉死ゆえであり、これからの心中は、八百屋としての死であると言う。妻には二つに切つた抱帯の一筋を自分の腹に巻かせ、もう一筋を妻の腹帯とする。妻を刃で刺し、自身は喉笛を一刀で貫いて死んでいる。一方、近松作の半兵衛は、刀で妻を刺した後、作法に則つて切腹を行う。殉死ではない。まず、彼女の抱帯を二つに切り、両肌脱いで、

みずおちと臍の二か所を締めつける。脇差を逆手に持つて二首を詠み、「しやんと左手の腹に突き立て、右手へくわらりと引き回し。返す刃に笛掻き切り。この世の縁切る」としている。

結句については、向井芳樹「近松世話浄るりの結句について」（一九六九年三月）に詳しい分析がある。結句の意味は、「作中の世界や人物との関わりが深いので、追善・回向の語句の有無は、作者の作中の人物に対する姿勢をあらわすことになる。」¹⁵と云う。

第二節で確認した「曾根崎心中」の結句は次のとおりである。

誰が告ぐるとは、曾根崎の森の下風音に聞え。とり伝へ、貴賤群衆の回向の種。未来成仏疑ひなき、恋の。手本となりけり。

本作の場合は次のとおりである。

心中、ヤレ心中。死んだくくと、呼ばゝる声、吹き伝へたる浜松風。枝を鳴らさぬ君が代に。類まれなる死に姿、語りて。感ずるばかりなり。

前者には、お初・徳兵衛の追善回向と心中賛美を描いている。後者はそれと対照的である。実際に亡くなっているにもかかわらず、回向の意を示していない。「類まれなる死に姿」、すなわち切腹の姿に重心をおく。切腹は、本来刑罰としての死である。近松は、半兵衛に観察的で冷めた眼差しを向けているようである。

七 まとめ

本稿では、主人公の困難に注目しつつ、作品の方法を考察した。本作までの近松心中物の一般的な方法は、「曾根崎心中」を例に考察したとおり、主人公の身にふりかかる困難を中心に葛藤を描いている。すなわち、主人公は困難に直面することで置かれた現状を確認し、心中の覚悟を決める。その流れの中に内面的葛藤をくみ取ることが出来る。作品によって覚悟の内容などに違いを描いてゆくものの、「心中天の網島」までは主人公が窮地に追い込まれる設定を重視した。

ところが本作の半兵衛には困難がなく、窮地に陥る場面がない。中巻では、平右衛門に意見を受けて切腹に及ぶところがあるが、切羽詰まったあげくのものとはしていない。そもそも半兵衛と千世は仲睦まじい夫婦であった。八百屋の商売にも、千世の実家にも何ら問題はない。心中の原因となるのは、養母が千世を嫌い、実家へ送り返すほどであったことである。彼なりの苦しい心情はあったであろうが、窮地に陥ることのないまま、先回りの心中覚悟をしたと言える。

さらに注目すべき点は、上巻で「武士」へのこだわりを描いていることである。山芋問答、衆道捌きの両方の出来事に、「武士」を

自任する半兵衛の判断を活かし、そこで賞賛される。同時に、作者は、武士社会そのものを批判し、武士たちの世事に疎い様子を描く。ならば、大事をなさうとすると、常に「武士」の面子にこだわ半兵衛にも冷めた眼差しを向けていることになる。

作者は、最初の「曾根崎心中」で、ふりかかる困難を乗り越え未来で結ばれようとした主人公たちの心中を賛美していた。ところが、最晩年の本作では、それは対照的な作品を描く。半兵衛は切れ者ながら、世事に疎い人物である。困難を避けようとして考えをめぐらし、身重の千世を道連れに空しい心中を遂げてしまう。

中巻切に、平右衛門が自身の命の限界を感じつつ、夫婦を水酒盛りと門火で送り出す場面がある。近松は、自己を重ねる意図を持って平右衛門を形象化し、死に急ごうとする者たちに対する哀れみをこめたのではないだろうか。

注

- ① 実説については、土田衛「近松作品の事実と虚構心中宵庚申」(『国文学解釈と鑑賞』一九七〇年十月)に詳し。
- ② 松田修 法政大学出版局 一九六三年
- ③ 荒木繁『近松論集』七 一九七八年六月。のちに『語り物と近世の劇文学』(桜楓社 一九九三年)所収。
- ④ 松崎仁『立教大学日本文学』二十四号 一九七二年七月。のちに『元禄文学研究』(東京大学出版会 一九七九年)所収。

- ⑤ 信多純一『帝塚山演劇学』二一一 一九六九年五月。
- ⑥ 廣末は、同書（一九五七年 未来社）で、「世話悲劇」論を説明し、社会的葛藤を経て主人公がとるべき意志的行為が、かえって主人公を絶望的な状況に陥らせる内容であると説いている。
- ⑦ 原道生『文学』一九七五年六月。
- ⑧ 向井芳樹『同志社国文学』十九 一九八一年十月。
- ⑨ 拙稿「曾根崎心中」成立の意義——世話狂言との比較をめぐって——『日本文学』二〇〇七年十二月。「曾根崎心中」は、九平次を創作することで、心中に至る経緯をわかりやすく説明しようとしたことを述べた。
- ⑩ 廣末保 注⑥に同じ。
- ⑪ 重友毅 岩波書店 一九五八年。
- ⑫ 諏訪春雄 笠間書院 一九七四年。
- ⑬ 井口洋『日本文学』一九八一年七月。後に『近松世話浄瑠璃論』（和泉書院 一九八六年）所収。
- ⑭ 土田衛 注①に同じ。
- ⑮ 向井芳樹『日本文学研究』一 一九六九年三月。のちに『近松の作法』（桜楓社 一九七六年）所収。同論文で、向井は、追善・回向のない本作の結句の意味について、「その上巻の異質性による分裂的傾向や、海音の作品よりおかれて、それを目標に書かれたものであったことなどに、原因をもとめるか、あるいは、心中に対する姿勢が変わったのか（以下略）」との推測を示している。
- 〔付記〕 作品の引用は、鳥越文蔵他校注・訳者『新編日本古典文学全集 近松門左衛門集』二（小学館 一九九八年）による。作品と先行研究の引用にあたっては適宜表記を改め、ふりがなを省略するなどの処理をした。